

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02670

研究課題名(和文)音楽科教育における教育内容の多様化に即した教材・学習材概念の検討

研究課題名(英文) Teaching and Learning Materials in School Music Education: Considering the diversification of educational content

研究代表者

石出 和也 (Ishide, Kazuya)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90552886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：教材という言葉は、広く日常的に使用されている言葉である。一方で、学校教育における教材とは、教科指導の中核となる概念である。今日の音楽科教育は様々な音や音楽文化を視野に入れるようになり、教育内容には広がりが見られる。音楽科の教材概念を再検討することは、多様な音楽科授業を構想・実践するための基盤となる。

本研究ではまず、音楽科の「教材」が文脈に依存していること再確認した。文脈とは主に定義、言説、学習指導要領、学習指導案などを指す。学習活動の種類(歌唱・器楽・音楽づくり/創作・鑑賞)も文脈として作用する。更に教材を、その現れ方と受け止められ方も含む機能的な働き次元で捉える方法と可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、音楽科授業についての実践研究や、音楽科授業の新たな試みについての提案などは豊富に存在している。一方で、音楽科における「教材」概念は自明のものとされる傾向にあり、教材概念に立ち返って音楽科授業のありようを追究している例はきわめて少ない。

音楽科は、抽象的かつ不可視であり、さらに、瞬間的で流動的な音・音楽についての学びが中心となる。他教科とは異なるこうした音楽科の特質を見つめ直すとき、教科全般にわたる教材論・教材学研究だけではなく、音楽科授業における子どもたちの学びに即した教材論が必要である。

研究成果の概要(英文)： The word "teaching materials" is a word used in everyday life. On the other hand, teaching materials in school education are a central concept in subject instruction. In recent years, school music education has been required to plan music learning by taking into account various sounds and musical cultures. The content of school music education is expanding. Therefore, sorting out and reconsidering the concept of music teaching materials will provide a foundation for planning and implementing a variety of music classes.

First, this study reaffirmed that music education materials are context-dependent. Context here refers to definitions, discourse, course of study, lesson plans, etc. Furthermore, I pointed out methods and possibilities for understanding music education materials not in an ontological sense but in terms of their functional roles.

Especially in music education, it is necessary to consider how the teaching materials will be presented and received.

研究分野：音楽教育学

キーワード：教材 学習材 音楽科教育

## 1. 研究開始当初の背景

いわゆる「教育内容の現代化」の潮流のもと、1980年代の音楽教育学研究では「教育内容」と「教材」を分離することが提起され、両者の関係性が活発に議論された。しかしそれ以降、教材についての議論は沈静化しており、現代の音楽科教育に見られる教育内容の多様化に即した音楽科の教材概念・学習材概念の追究はさほど進展してはいない。

「学習指導要領」(平成29年3月告示)において、音楽科の目標が「…生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を…」(小学校)「…生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を…」(中学校)と示されていることから窺えるように、今日の音楽科教育には、様々な音や音楽文化(文化が生み出す音楽/音楽が生み出す文化)をも視野に入れて子どもの音楽学習を組織することが求められている。こうした教育内容の拡がりをも勘案すれば、音楽科の教材概念を整理・再検討することは、多様な音楽科授業を構想・実践するための基盤となるはずである。

## 2. 研究の目的

教育学者シュワブによれば、「教科の構造」は内容的構造(教科内容を構成している知識)と構文的構造(教科の性格を特徴づける知識)の2つに区別されるという<sup>1</sup>。例えば幼児期～小学校低学年の音遊びでは、音楽以外の「音」も中心となり、音楽づくり/創作の学習活動では、「音」を「音楽」へと構成していく過程を体験的に学ぶ。このように、「音楽」概念の形成途上にある子どもたちを対象とする音楽科授業の性格(即ち音楽科の構文的構造)の1つは、「音楽」のみならず「音」も主題化されるという点にある。音楽科の教材・学習材概念を追究する本研究が最終的に目指しているのは、音楽科という教科の性格を論理的に説明することであり、本研究は、その予備的研究として位置づけられる。

音楽科は、抽象的かつ不可視であり、さらに、瞬間的で流動的な音・音楽についての学びが中心となる教科である。そのため、「〇〇を教材として授業に導入する」という実体論的な教材の捉え方のみではなく、教材を動的かつ現象的に捉えることのできる教材概念も構想することで、より実際の音楽科授業に即した教材論を見いだすことが期待できる。

## 3. 研究の方法

本研究はその性格上、先行研究についての調査を徹底することが中心となる。小学校および中学校の音楽科授業、音楽科における教材・学習材、教科指導における教材論などに関する先行研究(文献および学術論文)を調査・検討し、音楽科の教材概念がどのように把握されているのか(把握されてきたのか)を具体的に分析する。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の前提となる問題意識

人が何かを学ぶとき、そこには学びを誘発する事物や現象——もの・こと——が存在しており、それらが認識の変容をもたらすメディア(媒体)として機能している。学校教育の場合、最も大きな視点で捉えるならば、「学校」という時空間それ自体が、子どもたちにとっては学びのメディアである。さらに範囲を限定すれば、「学級」、すなわちともに学ぶ仲間や教師も、子どもにとっては学びのメディアとなる。特に、文化と子どもたちを取り結ぶ媒介者として教師を捉える視

---

<sup>1</sup>佐藤学『教育方法学』岩波書店、1996年、pp.115-117.

点は、学校教育を文化的実践として位置づけるうえでは非常に重要であろう。

学校教育の中心的な営みである「授業」もまた、何らかのメディアを介することによって学びが成立するという基本的な構造は同様である。授業を構想・実践・反省・批評する場面において、子どもたちの学びにかかわる素材は、一般に「教材」あるいは「教具」と呼ばれる。これまでの音楽科授業では、様々な楽曲、楽器、道具、材料、現象、事実などが教材として用いられてきた。

しかしながら、音楽科授業についての実践研究や、音楽科授業の新たな試みについての提案などは豊富に存在している一方で、教材概念に立ち返って音楽科授業のありようを追究している例はきわめて少ない。

## (2) 音楽科にみる「教材」の文脈依存性

そこで本研究では、最初に、このような実際の教材群（教材の外延）と、内包的な定義としての教材概念との関係を検討し、特に、音楽科の教材を取り囲む重層的な文脈に着目した。音楽科授業の教材について思考する主体は、定義を前提としつつ、同時に様々な資料を参照し、更に音楽科の教材についての様々な言説に触れ、学習指導案を作成したり読んだりする際にはその慣習に従うというように、重層的な文脈のなかに身を置いている。音楽科の教材を取り巻く文脈とその特徴については、一例として以下を指摘することができる。

- ・学習指導要領の範疇においては、教材として主に楽曲が想定されている（前提されている）。
- ・器楽指導における教材の捉え方については、楽曲だけではなく、楽器自体も学習場面や学習段階に応じて教材になり得ることを示唆する言説が見られる。
- ・音楽科の学習指導案においては、楽曲を教材として位置づけることが慣習化している。
- ・児童生徒たちが作品（楽曲）を創り上げていく音楽づくり／創作の場合は、学習活動に先立って楽曲は存在していないため、「創作指導の教材とは何であるのかよく分からない」と思考が浮遊しがちである。一方で、音を音楽にしていく体験や場そのものを教材とする考え方も見られる。

このように、音楽科授業の教材について思考する主体の耳目に触れる主なもの——定義、言説、学習指導要領、学習指導案など——は、教材というものについて思考する際の文脈としては、それぞれ微妙に異なる性格や強調点を持っているという点を、先行研究に基づきながら確認した。即ち、「教材」という用語や視点がどのような文脈の中で用いられているのかによって、音楽科の教材についての様々な解釈が引き出されるのである。当然、歌唱・器楽・音楽づくり／創作・鑑賞といった学習活動の種類もまた、我々が教材について論じる際の文脈として作用する。

無論、これらの中は、既に承知されている事柄も含まれているであろうし、また、確認・指摘としては非常に地味な内容でもある。しかしながら、こうした事実がこれまでは積極的に指摘・言及されてこなかったことを踏まえれば、音楽科の教材を「文脈依存性」という視点から再整理した点に、本研究の意義の1つがある。

なお、これらの研究成果については、以下の研究発表および学術論文として取りまとめた。

〔研究発表〕

発表題目「音楽科教育における教材・学習材概念－教育内容の多様化に即した再検討－」  
(日本音楽教育学会第50回大会／2019年10月19日)

〔学術論文〕

「音楽科教育における教材概念」

『北海道教育大学紀要』教育科学編，第72巻第2号，北海道教育大学，2022年，  
pp.305-315.

### (3) 「機能的関係概念としての教材」という視点から音楽科の教材を検討する

八木・川村(2007)は、音楽科における教材の働きを以下3つの類型——「解釈」「構成」「生成」——に整理している<sup>2</sup>。

	音楽科における 教材の働き	他教科における 教材との類似性
【解釈】	教材としての楽曲を再表現する，あるいは鑑賞する。	国語
【構成】	一定の教育内容(音楽的概念など)の理解という目的のもとに， 楽曲作品や楽曲作品以外のさまざまな素材や現象を教材として 位置づける。	社会科・理科
【生成】	「場」そのものが教材として働く(つくって表現する活動 など)。学習者が自ら教育内容を生成する。	生活科

多くの音楽科授業において，楽曲(音楽作品)は教材の典型である。とはいえ，例えば鑑賞や表現の対象として，児童生徒たちに同一の楽曲が提示される場合であっても，児童生徒一人ひとりの聴き方や五感の働かせ方，認識の仕方などは当然異なっている。即ち，実際の授業展開を視野に入れれば，音楽科における「教材」とは，単に楽曲名や楽器名などとして記述される段階に留まるものではなく，本来的には，それが学習者の側にとってどのように現象するのかまで含めて考えるべきものであろう。

教材を巡るこうした問題意識に関連した提起として，小笠原(2014)は「教材」を実体的概念ではなく機能的関係概念として捉える立場を採り，「教材とは，学習場面において文化内容を学習者の認識に変換するプロセス全体の働きである」<sup>3</sup>と再定義している。授業を構想する段階においては，「教材は何であるのか」「何を教材として授業に導入するのか」というように，教材は実体論的に捉えられる傾向にある。しかしながら教材とは，決して授業実践に先立って準備するだけのものではない。準備した教材が，実際に子どもたちに対してどのように機能しているのが本来的には重要であろう。つまり「機能的関係概念としての教材」とは，教材が実際にどのように子どもたちに働くのかという，プロセス全体の検討を含んでおり，授業の現実により近い形で教材を考えようとすることに他ならないのである。

既に確認した通り，学習指導要領の範疇における音楽科の教材は主に楽曲を想定していることから，関係論的な概念ではなく実体論的な概念に傾斜している。実際，歌唱・器楽・鑑賞については，実体論的な教材の捉え方——教育内容からは独立した形で「教材は○○という楽曲であ

<sup>2</sup> 八木正一・川村有美「音楽科における教材概念の検討と授業の構成」『教材学研究』18，日本教材学会，2007年，pp.43-50.

<sup>3</sup> 小笠原喜康「機能的関係概念としての「教材」－実体から機能的関係へ－」『教材学研究』第25巻，日本教材学会，2014年，pp.15-26.

る」と表明すること——が可能である。けれども、創作指導における教材の場合は、学習に先立って楽曲は存在していない。

先に示した八木・川村（2007）による3つの類型のうち「生成」とは、現在の音楽科教育では音楽づくり／創作における教材の働きに相当する。そこで本研究では、「場」そのものが教材として働くということの内実を、より明瞭に把握することを目指した。全音音階と五音音階に基づく音楽づくりの指導モデルを参照しつつ<sup>4</sup>、教材・教具という概念的区分をいちど解除し、鹿毛（2008）のいう授業の「しかけ」という視点を導入することにより<sup>5</sup>、音楽づくり／創作の場全体を総体的に捉えることを試みた。

音楽づくりの学習活動が展開される「場」には、授業者が意図的に設定したさまざまな楽器、道具、条件（音階などの音楽的概念）が存在している。「場」を構成しているそれら一つひとつの要素を、学習者に対して意図的な作用を及ぼしうる「しかけ」として捉えなおすことで、音楽づくりにおける教材の働きを、「しかけ」が複合的に作用する「場」と捉えることが可能となる。そして、この「しかけ」という呼称自体が、そもそも学習者に対する「働き」や「機能」という視点を強く意識したものである。

実体論的に「楽曲」が現前する歌唱・器楽・鑑賞とは異なり、「楽曲」という捉え方がはじめから解体されている音楽づくり／創作を、さまざまな「しかけ」が複合的に作用する「場」と捉えることは、小笠原（2014）のいう「機能的関係概念としての教材」という点を、音楽科教育の視点から追究することに適していると考えられる。

なお、これらの研究成果については、以下の研究発表および学術論文として取りまとめた。

#### 〔研究発表〕

発表題目「教材論的視点からみた音楽科授業の特質」  
（日本音楽教育学会第53回大会／2022年11月5日）

#### 〔学術論文〕

「創作指導にみる教材・学習材の諸相」  
『北海道教育大学紀要』第76巻，北海道教育大学，2024年。（掲載予定）

#### （4）結論

文章や図表などで構成された可視的な学びのメディアとの関わりが中心を占める教科に比べると、音楽科は、抽象的かつ不可視であり、さらに、瞬間的で流動的な音・音楽についての学びが中心となる。そのため音楽科は、我々にとって慣習化されている実体論的な教材観だけでなく、関係論的な働きの次元で教材を捉えることの意義を理解することにも適した教科であろう。

音楽科の教材・学習材概念を、子どもにとっての「あらわれ方」とその「うけとめ方」までも含む概念として再整理することの可能性を示した本研究の成果は、これからの学校教育現場において、より柔軟で多様な音楽科の教材研究を行うための手掛かりとなるはずである。

---

4 以下に示されている音楽づくりの学習モデルを参照した。

『小学音楽 音楽のおくりもの6』教育出版，2019年，pp.46-47.

5 鹿毛雅治「授業づくりにおける「しかけ」」秋田喜代美編『授業の研究－レッスンスタディへのいざない－』明石書店，2008年，pp.152-168.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石出和也	4. 巻 第72巻第2号
2. 論文標題 音楽科教育における教材概念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要（教育科学編）	6. 最初と最後の頁 pp.305-315.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石出和也
2. 発表標題 教材論的視点からみた音楽科授業の特質
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石出和也
2. 発表標題 音楽科教育における教材・学習材概念 - 教育内容の多様化に即した再検討 -
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------